



未生

2022 12

く月替りのアーティストが
季節の植物をテーマに語ります

花とアートのスケッチ・コラム

今月のアーティスト 森 夕香

「憧れのバナヤンツリー」

解剖学者である三木成夫氏によると「植物というのは動物の腸管を引き抜いて裏返したようなものである」という。印象的なその言葉を思い出したように、常に環境と地続きで生きる植物に対して、憧れのような感情が生まれる。人間も植物のように体の表面全体で環境と交わりながら生きていくことはできるのだろうか。最近はそのような風に植物の身体感覚を想像しながら人間と環境の関係性をテーマに絵を描いている。

私は滋賀県の比叡山の麓で育ち、日々移り変わる美しい自然の中を毎日学校に通わせてもらった。その比叡山には千日回峰行という千日かけて行う修行がある。

その行の中には「堂入り」と呼ばれる期間があり、修行者は九日間飲まず食わずで、寝ずに真言を唱え続ける。普通人間は水分を取らないと四日ほどで死んでしまうというが、堂

私にはそんな生死を彷徨うような経験はないが、一つ思い出したことがある。それは六年前にインドに行った時に見たバナヤンツリーのことだ。バナヤンツリーとはベンガル菩提樹のことで、枝からたくさんの気根を垂らしてそこから横にどんどん広がって成長して力強い樹木である。インドに何度か足を運んでいる友人に「バナヤンツリーの葉っぱを触るだけでもインドに行く価値があるわよ。」と誘われ、いつの間にかインドに来ていた。バナヤンツリーの葉っぱはベルベットのようで触れると異世界にトリップできるほど極上の触り心地らしい。そして遂にバナヤンツリーにもお目にかかり、葉っぱを触らせてもらった。確かにそれはベルベットのよう高密度に起毛した布のようだった。触感で異世界にトリッ



「背景はもうない」

2020年制作
和紙・日本画顔料
333×242mm

入りは九日間である。しかし不思議なことにこの行を成し遂げた人達がいるのである。この話を中学生の頃に学校で聞いた時、先生が言っていたことが今になってとても興味深く思いつかれる。それは「この行の最中に雨が降るか降らないかがとても重要で、雨が降ると行を達成する確率（生存率）が上がる。」という話だった。

それはどういふことなのだろうか。湿度が高い方が喉が渴きにくかったり皮膚が乾燥しにくいということはもちろんあると思うが、私はその時体の皮膚全体で空気中の水分を吸収する人間の姿を想像した。いざとなったら人間も植物のように全身が腸管の内側のようになって空気中の水分を吸収するのかもしれない。



バナヤンツリー（筆者撮影）

ブとまではいかなかったが、濃厚な朝霧の中に佇む木の姿は力強く美しかった。そしてその木の下で友人とインドの子供たちと瞑想した。

釈迦が瞑想をし、悟りを得たのは、バナヤンツリーと同じクワ科のイチジク属であるインド菩提樹の下であると言われている。全く同種の木ではないが、菩提樹の葉から放出されている酸素の下で呼吸をしているということは同じである。釈迦に思いを馳せながら、吸い込むしっとりひんやりした空気は心地よかった。温度や湿度、そこにいる人たちの呼吸や、葉っぱが落ちる音、変化し続ける環境を全身で吸収していた。常なるものではなく、全てが変化し続けていることを仏教では無常という。植物というのはそんな世界を実感させてくれる。やはり、私にとっては憧れの存在なのである。

プロフィール

森 夕香（もり ゆか）

1991年 大阪生まれ滋賀県大津市育ち
京都市立芸術大学大学院 修士課程日本画専攻修了
主に京都、東京で個展、グループ展を開催

森 夕香 Instagram 今後の活動予定などの情報を更新しています。

@mori1227



MORI1227